

8 近世陶磁器の出土傾向

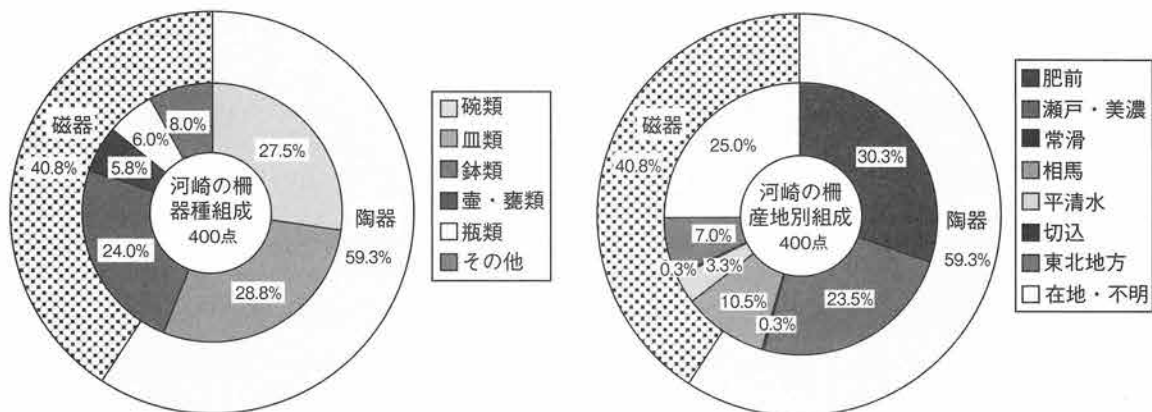
堀立柱建物や墓など多くの近世遺構が確認されている本遺跡では、総破片数約2000点以上、個体数にして500点を超える近世陶磁器が出土した。本節では遺跡内出土の近世陶磁器について、主に器種・産地組成を中心に検討を加える。

器種と産地組成

詳細は事実記載の項に記してあるので、ここでは大まかな器種組成と産地構成についてみていく。まず材質別にみると、総掲載点数400点のうち陶器が238点、磁器が162点である。破片数計算に基づいた点数ではないため誤差を含む可能性はあるが、およそ6：4の割合で陶器が多い。全体的な器種構成をみると、大別器種として碗類（茶碗・湯呑など）、皿類（大皿・中皿・小皿・型打皿など）、鉢類（香炉・火鉢・大鉢・播鉢など）、壺・甕類、瓶類（德利・土瓶・急須など）、その他（紅皿・蓋・向付・花生・小壺・合子・根付・汽車茶瓶・ひょうそくなど）に分類することができ、多い順に皿類29%（115点）、碗類28%（106点）、鉢類24%（96点）、壺・甕類6%（25点）、瓶類6%（24点）、その他8%（36点）となっている（グラフ参照）。

次に材質ごとの器種組成をみていく。まず陶器は238点のうち、碗類（茶碗・湯呑）21%（49点）、皿類（大皿・中皿・小皿）24%（58点）、鉢類（香炉・火鉢類・大鉢・黄瀬戸鉢・播鉢など）37%（89点）、壺・甕類8%（18点）、鍋類（行平鍋・焙烙）2%（4点）、瓶類（德利・土瓶）5%（11点）、その他（蓋・向付・花生・汽車茶瓶・乗燭）4%（9点）となっている。鉢類が最も多く、ついで皿類、碗類となっており、細別器種でみると鉢類では播鉢や大鉢（鉄絵鉢・黄瀬戸鉢など）といった調理用具、皿類では志野丸皿や灰釉輪花皿などの小皿が多い。産地については、肥前、瀬戸・美濃、常滑、相馬（大半が大堀相馬）、その他不明のもの（東北地方諸窯あるいは在地産か）がある。

磁器は162点のうち、碗類（茶碗・湯呑）35%（57点）、皿類（大皿・中皿・小皿・型打皿）35%（57点）、鉢類（火鉢類）4%（7点）、甕類1%（1点）、瓶類（德利）8%（13点）、その他（紅皿・蓋・小壺・合子・根付）17%（27点）となっており、碗類と皿類が大半を占め鉢・甕類などの大型器種は全体の1割に満たない。細別器種をみると、碗類では肥前産丸碗と瀬戸産端反碗が多く、その他の器種として紅皿も多く出土している。産地については、肥前、瀬戸、東北地方諸窯（平清水系・切込含む）がある。



河崎の柵擬定地近世陶磁器組成

18世紀以降の肥前産製品が圧倒的多数であり、瀬戸窯産製品は19世紀前半代、東北地方産と思われるものについてはおおむね19世紀前半代以降と考えられる製品が確認できる。

年代について

本項では、各生産地における編年をもとに本遺跡出土陶磁器の年代について検討を加える。

① 肥前産製品

肥前産製品については大橋康二による編年をもとに年代を考えていく(大橋1989)。陶器は碗・皿・香炉・鉢の4器種31点が確認できる。このうち刷毛目碗(3004)は大橋編年Ⅲ～Ⅳ期(17世紀後葉～18世紀前葉、以下大橋Ⅲ期とする)、京焼風の皿(3047～3050)は大橋Ⅲ期(17世紀後半)、陶器染付香炉(3097)が大橋Ⅳ期(18世紀前半)に位置づけることができる。また、呉器手碗(3005～3008)・刷毛目鉢(3129・3132など)・三島手鉢(3125・3139など)は多くが体部破片であるため根拠に乏しいが、おおむね大橋Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられるものと考えられる。

磁器は碗・湯呑・皿・鉢・瓶など89点が確認でき、ほとんどが単色染付製品である。このうち4068の皿は大橋Ⅱ期(17世紀前葉)、4153の青磁輪花大皿は波佐見産で大橋Ⅲ～Ⅳ期と考えられるが、その他の多くが大橋Ⅳ期(18世紀前葉～中葉、4001・4002・4051～58など)、または「くらわんか手」と呼ばれる大橋Ⅴ期(18世紀後葉～19世紀前葉、4003～4009など)の製品である。

② 瀬戸・美濃窯製品

瀬戸・美濃窯産製品は、器種のバリエーションが全産地の中で最も多く、年代幅も大窯期後半から連房式登窯第3段階(16世紀末～19世紀中葉)までと広い。ここでは藤澤良祐による大窯および瀬戸窯編年をもとに考えていく(藤澤1998・2002)。まず最古例として大窯4期の製品があり、灰釉丸皿(3051)、内禿皿(3057)、志野丸碗(3019)、志野反り皿(3069など)、志野菊皿(3074～3076)などがまとまって出土している。続く連房式登窯期に入ると、連房第1段階(17世紀初頭～後半、以下連房を省略)には美濃窯産製品が多く確認できる。第1・2小期には鉄絵皿(3056など)、志野製品(3077など)、鉄絵鉢(3126など)、第3・4小期には灰釉小皿(2059～2066)、黄瀬戸菊皿(3080～3082)、鉄絵鉢(3127など)があり、大窯期から継続してまとまった量が搬入されている。しかし、続く第2段階前半(17世紀末～18世紀前葉)になると出土量は減少し、3016の腰鍔(第5・6小期)を除いて明確にこの時期に比定できるものはほとんど確認できない。

第2段階後半から第3段階初頭(18世紀中葉～後葉)に比定できる製品には播鉢(3148・3149)・灰落し(3103・3104)・陶器染付の皿(3087)などがあるが、大窯4期から連房第1段階までに比べて出土量は多くない。続く第3段階後半(19世紀前葉)になると出土量はさらに減少し、瓶掛(3111)や片口(3119・3120)のほかはこの時期以降に位置づけられる製品は確認できない。

磁器は、広東碗・端反碗・筒形湯呑・皿の4器種14点が確認できる。いずれも単色染付製品で、連房10～12小期(19世紀前半～後半)に位置づけられるものである。

③ 相馬産製品

相馬産製品については生産地資料を用いた編年が確立していないため、関根達人による消費地資料を用いた編年を参考に年代を考える(関根1998)。全て陶器で、器種は碗・皿・鉢がある。まず、最古例に位置づけられるのは尾呂茶碗写しの碗(3022)で、仙台城二の丸第3号土坑出土土例と類似していることから18世紀前葉頃のものと考えられる。ただし、この他にはこの時期に位置づけられるものは確認できない。

体部下半の張りが強く緑色の釉調をした小杯(3041・3042)は18世紀後葉～末、鉄絵が施される丸碗

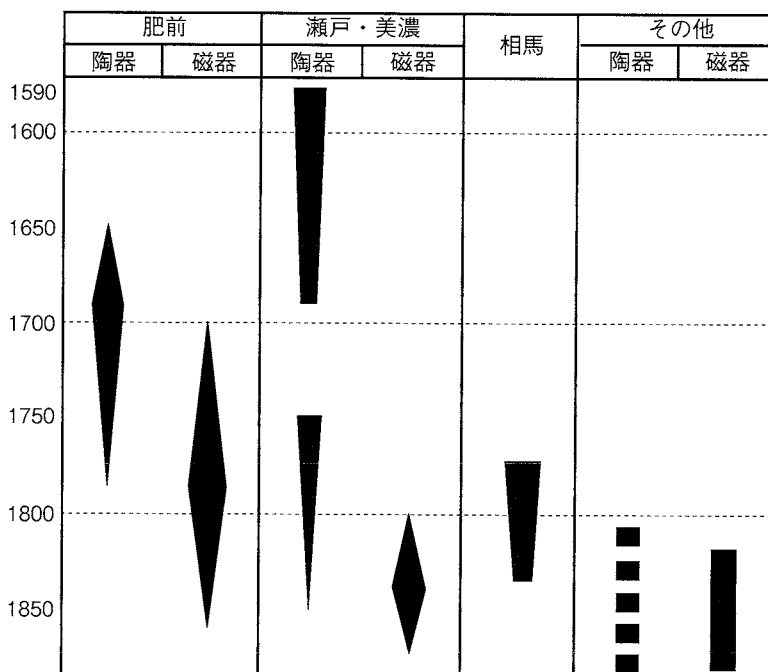
(3021) や体部の開きが強く口径が大きいタイプの腰鑄 (3026) など18世紀末～19世紀初頭に位置づけられる (関根1998)。その他にも3091～3093の輪花小皿など、同様の釉調のものを同時期のものとすれば、18世紀前葉頃と比べて出土量は大幅に増加しているといえる。

釉薬の変遷については検討を要するが、一般的に失透性の藁灰釉系陶器は19世紀に入ってから出現するといわれている。この見解に従うと、3023・3024などは19世紀以降の製品と推定され、それに類するものも本遺跡では一定量確認できる。ただし、19世紀以降の相馬産製品の変遷については不明な点が多いため、詳細な年代については今後の検討課題としておきたい。

④ その他

本遺跡では、その他の産地と考えられる製品も数多く出土している。まず量的にもっとも目立つのが磁器である。このなかで切込窯産と思われるものは4161の碗1点のみであり、その他はいわゆる平清水系または東北地方諸窯産と推定されるものである。その他にも陶器では常滑産の大甕 (3231) が1点確認できるが、海鼠釉が施される鉢類 (3184・3186など) や器高が高く胴部が深い形状の播鉢 (3145～3147など) が量的には多い。これらについても東北地方諸窯産と推定されるが、東北地方の窯業生産地については開窯年代を含めて不明な点が多く、編年についても確立されていない。そのためこれらについては年代比定の根拠が乏しく、現状では東北地方に窯業生産技術が定着した19世紀前葉以降の製品であると考えておきたい。

最後に各産地を総合した出土量の傾向についてまとめておきたい (消長図参照)。まず、本遺跡で最も古く位置づけられる近世陶磁器は美濃窯産大窯 4 期 (16世紀末) の志野製品である。これ以降17世紀前半には瀬戸・美濃窯連房式登窯第 1 段階の製品が一定量搬入されており、この段階では瀬戸・美濃窯産陶器が組成のほとんどを構成している。しかし、17世紀後半以降には瀬戸・美濃窯産陶器の搬入量は徐々に減少していき、18世紀前半にはいったん途絶える。一方で、肥前産製品は17世紀前葉 (大橋Ⅱ期) の磁器皿以降、刷毛目・三島手などの陶器が確認される17世紀後葉 (大橋Ⅲ期) にかけて徐々に増加しており、18世紀 (大橋Ⅳ期) には磁器も加わって19世紀以降の東北地方諸窯産製品の増加時期まで陶磁器組成の主体となっていく。また、この頃から少量ながら相馬産陶器も確認されるようになる。



河崎の柵擬定地近世陶磁器の消長

続く18世紀後半には、再び瀬戸・美濃産製品では挿鉢や鉢などの大型器種が確認されるようになるが、17世紀代よりも出土数は少なく、代わって相馬産陶器が大幅に増加する。そして、19世紀以降になると相馬産陶器と瀬戸窯産磁器の出土量も増加しているものの、この頃には東北地方諸窯産と考えられる製品が量的に圧倒し、陶磁器組成のなかで大きな比率を占めるようになる。これ以後は肥前、相馬、瀬戸・美濃の3者で構成されていた組成が東北地方諸窯産主体となる組成へと変化し、以後型紙摺絵・銅板転写など近代磁器に主体が移っていくことになる。

県南部出土事例との比較

本節では県南部北上川流域及び沿岸部で近世陶磁器がまとまって出土し、100点以上実測図が掲載されている遺跡との比較を行い、本遺跡出土の近世陶磁器の傾向についてみていくことにする。今回取りあげるのは、北上川流域では胆沢町板子沢遺跡、前沢町川岸場Ⅱ遺跡、平泉町志羅山遺跡（第46次）、同町下構遺跡の4遺跡、沿岸部では大船渡市猪川館跡である。ここでは大まかな器種・産地・年代の比較に焦点を絞って検討を加える（355頁グラフ）。

①器種組成

各遺跡とも陶器が全体の5～6割を占め、そのうち碗・皿類が器種全体の6割近くである。また、グラフには表れていないが碗・皿類は陶器と磁器がほぼ同数、鉢・甕類はほとんどが陶器類であるという点も共通する。ただし、下構遺跡と志羅山遺跡では磁器の碗・皿類が卓越する。

②産地構成

各遺跡とも肥前産磁器の出土量が最も多く、次いで相馬産陶器、瀬戸・美濃窯製品の順となっている。常滑、京・信楽、丹波系などの製品も確認できるが、それらはごく少量であり客体的な存在である。ただし、今回比較した遺跡のなかでは川岸場Ⅱ遺跡と河崎の柵擬定地では相馬産陶器よりも瀬戸・美濃窯製品の出土量が多い。これには18～19世紀代に環濠屋敷と御蔵場が造営され最盛期を迎える川岸場Ⅱ遺跡と、大型堀立柱建物などが構築され17世紀代に一つのピークを迎える河崎の柵擬定地という形成年代の差はあるが、いずれも瀬戸・美濃窯製品の流通量が多くなる時期の遺跡であることを反映しているといえる。

③県内における近世陶磁器の出土状況

消費地遺跡における出土状況については、先学による研究があるため（羽柴1996・藤澤1998・大橋1999など）、これらを参考に岩手県内における近世陶磁器の搬入状況について検討を加えることにする。なお、遺跡の形成年代および調査面積が異なるため、遺跡内の全体量からみた年代を比較してもデータとして有効とはいえないことから、年代別の搬入量についてみていくことにする。

まず、県内における近世陶磁器の最古例としては猪川館跡出土の大窯1・2期（16世紀前半）の灰釉皿と天目茶碗を挙げることができる。この他にこの時期の製品が出土している遺跡は今回例示したなかにはないが、大窯1・2期の瀬戸・美濃窯製品あるいは青花皿などの舶載製品は主に城館跡で少量出土するようである。東日本太平洋側ではこの時期には未だ肥前産磁器より舶載製品の出土量が勝るということであり（大橋1999a・b）、岩手県内の出土状況もそれを追認するものといえる。

16世紀後半～17世紀前半には瀬戸・美濃大窯4期～連房第1段階および肥前産大橋Ⅱ期の製品が各地で確認されるようになる。瀬戸・美濃窯製品については岩手県を含む東北地方北部太平洋側では比較的多くの遺跡で出土が確認されているが（藤沢1998）、肥前産製品については衣川村瀬原Ⅰ遺跡や西館遺跡などで磁器皿が出土しているにすぎない。また、どの遺跡も総じて出土量は少なく、河崎の柵擬定地を除いて今回例示した近世陶磁器の出土量が多い遺跡でも傾向はほぼ同じである。

17世紀後半～18世紀代になると、東北地方北部全域で大橋Ⅳ期に属する肥前産製品の出土量が増加する。羽柴直人の集成によると、県北部（盛岡南部藩領域）の北上川流域では9割の肥前産陶磁器と1割の相馬産陶器で構成され、県南部（伊達藩領域）ではやや相馬産陶器の比率が高くなるということである（羽柴1994）。河崎の柵擬定地でもこの時期に限定すると肥前産磁器が8割、残り2割を相馬産、瀬戸・美濃窯産陶器で分け合うような組成となっている。

19世紀前半になると、肥前産製品では「くらわんか手」と呼ばれる大橋Ⅴ期の製品が大量に流通しており、前段階に引き続いて肥前産製品優位の産地構成となっている。県南部（伊達藩領域）においては相馬産製品の比率が急激に増加する一方、瀬戸・美濃窯産陶器は鉢類などの大型製品が若干確認されるのみとなる。また、碗・皿類など供膳具に限ると、河崎の柵擬定地・板子沢遺跡・川岸場Ⅱ遺跡のように18世紀後葉～19世紀には相馬産陶器が瀬戸・美濃窯産陶器を凌駕する遺跡も出現する。

まとめ

以上、冗長ではあったが他遺跡との比較も含め河崎の柵擬定地出土の近世陶磁器について検討を加えてきた。最後に本遺跡出土資料の位置付けについて述べてまとめとしたい。

年代別の出土傾向については県南部をはじめとして県内全域との状況と大枠ではほぼ同様の状況といえる。ただし、瀬戸・美濃窯製品に限ると連房第1段階に比べて第2・3段階の陶器製品が大幅に減少するというように、子細な点では仙台城二の丸のような東北地方南部に近似する時期も見受けられる。18世紀以降の器種構成については県南部（伊達藩領域）の状況とかわるものではないが、掘立柱建物および200基以上に及ぶ近世墓群が検出されている本遺跡では、出土個体数では川岸場Ⅱ遺跡（御蔵場跡）など特定の性格をもつ遺跡を除いては卓越している。16世紀末～17世紀前半における瀬戸・美濃窯製品の出土量が卓越する点と、それ以降の陶磁器の出土量および遺構群の多さは、古くは近世初頭に志野製品を嗜好し入手可能であったこと、それ以降も近代まで一定量の搬入品を入手可能な立場にあった家系の存在を裏付けるものといえる。

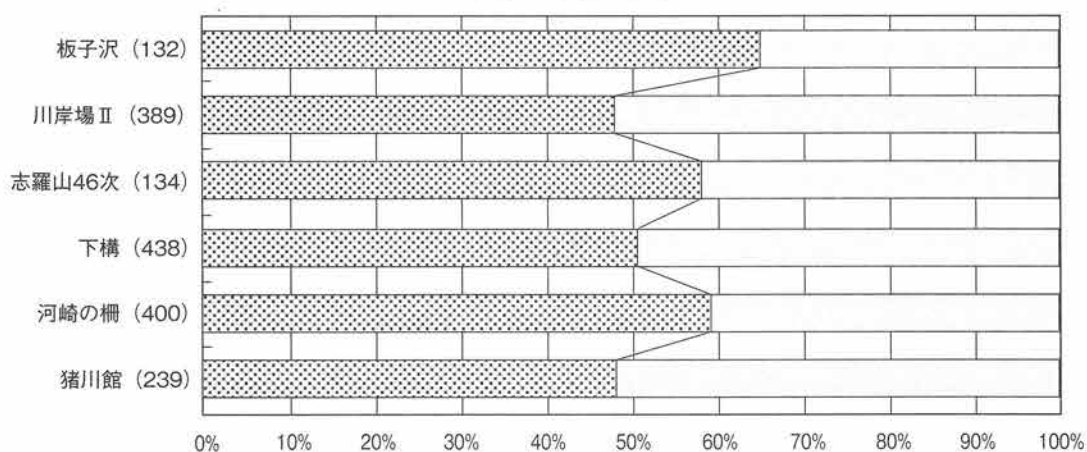
参考文献

- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
 大橋康二 1999a 「肥前陶磁の流通（東日本）」『国内出土の肥前陶磁 東日本の流通を探る』九州近世陶磁学会
 大橋康二 1999b 「北海道・東北地方出土の肥前陶磁」『国内出土の肥前陶磁 東日本の流通を探る』九州近世陶磁学会
 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』
 関根達人 1998 「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報10』東北大学埋蔵文化財調査センター
 羽柴直人 1994 「東北地方北部における近世陶磁器の様相 - 1690～1780年代の消費状況の集成 -」『紀要XⅣ』（助岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）
 福島県立博物館 1990 『東北の陶磁史』
 藤澤良祐 1998 「近世瀬戸焼の生産と流通」『瀬戸市史 陶磁史篇六』瀬戸市
 藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要 第10輯』（助瀬戸市埋蔵文化財センター）

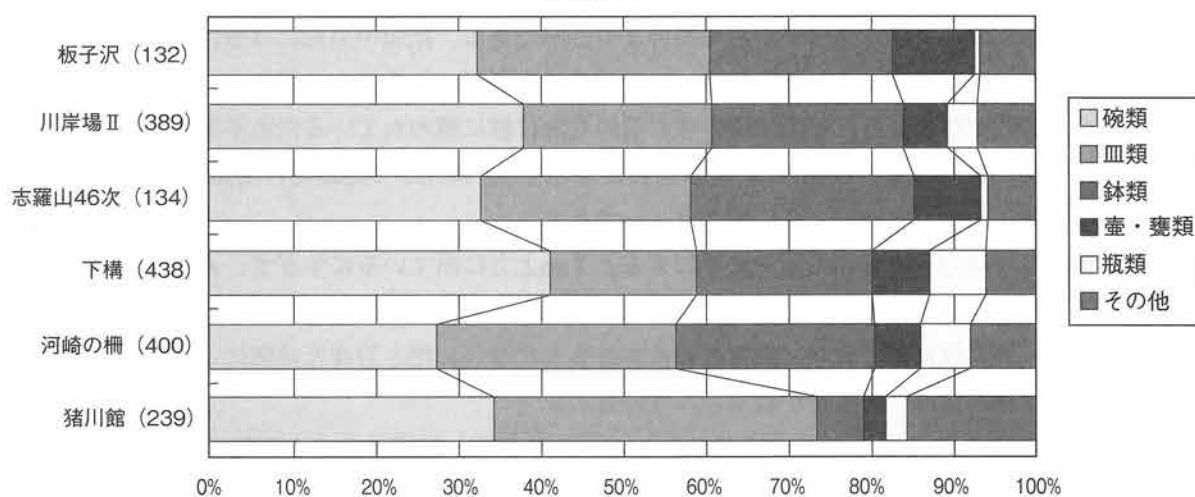
引用報告書（全て助岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発行）

- 小山内透 2000 『川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書』第317集
 斎藤博司 1994 『猪川館跡発掘調査報告書』第203集
 羽柴直人 2000 『志羅山遺跡第46・67・74次発掘調査報告書』第312集
 羽柴直人 2004 『下構遺跡第2次発掘調査報告書』第446集
 村上 拓 1999 『板子沢遺跡発掘調査報告書』第305集

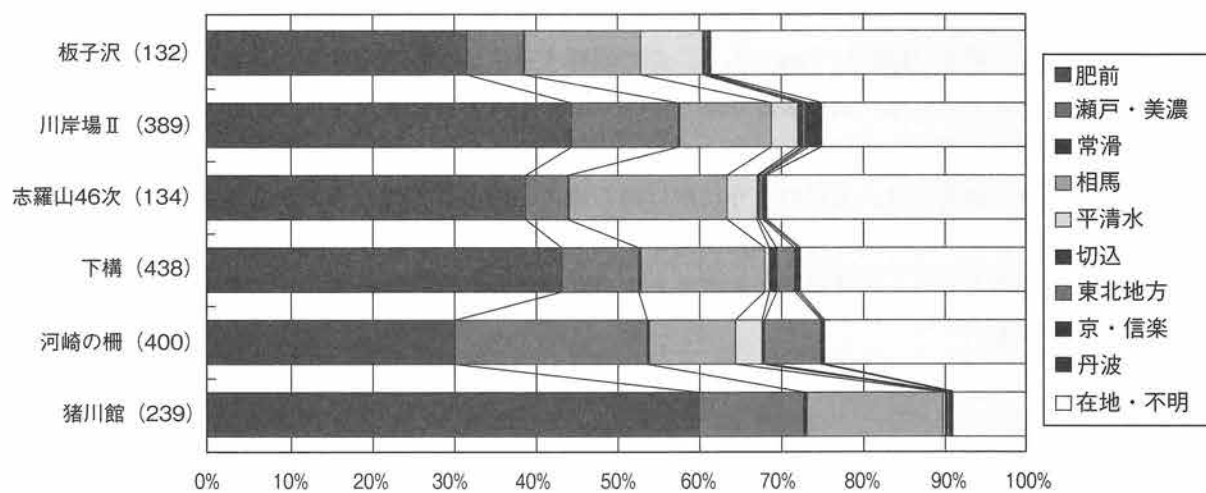
陶器・磁器の組成比



器種組成



産地構成



※ () 内は掲載点数

岩手県内主要遺跡における近世陶磁器出土比較